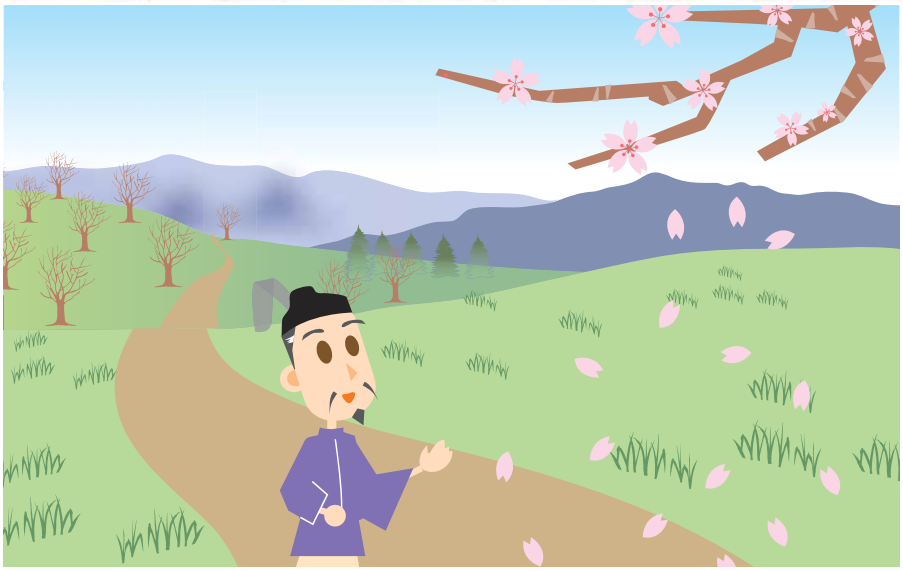
はじめての万葉集 Vol.12

日本に現存する最古の和歌集『万葉集』をわかりやすくご紹介。

龍田の桜よ散らないで



白雲の　龍田の山の　滝の上の
小桜の嶺に　咲きををる　桜の花は
山高み　風し止まねば　春雨の
継ぎてし降れば　秀つ枝は　散り過ぎにけり
下枝に　残れる花は　須臾は　散りな乱れそ
草枕　旅行く君が　還り来るまで

作者：高橋虫麻呂？（巻九の一七四七番歌）

白雲のたつ龍田の山の急流のほとりの小桜の嶺に、枝をたわめて咲く桜の花は、山が高いので風がしきりに吹くから、春雨がたえず降るから、上の方の枝はすでに散り果ててしまったことだ。下の方の枝に残っている花は、暫くの間は乱れ散ってくれるな。草を枕に旅行く方が帰って来るまでは。

『万葉集』には、花を愛でたり、散るのを惜しんだり、またそのことを女性にたとえたりする歌がたくさん見られます。

龍田の桜の歌も、花が散るのを惜しむ歌の一つに数えられますが、やや他とは様相が異なります。それは、複数の歌をまたいで、桜の花の盛衰を表現しているところです。

右の歌は、その出だしにあたります。山の上に咲き乱れていた桜の花も、風や雨のせいで、ほとんど散ってしまったけれども、まだ下の方の枝には残っていると。その残った花に対して、あの方が戻るまでどうかそのままで、と願っています。

ここで言うあの方とは、難波宮造営のために派遣された藤原宇合（不比等の子）のことです。歌を詠んだとされる高橋虫麻呂も、難波宮造営との関係で、大和と難波宮を往復する立場にあったようです。

虫麻呂は、頻繁に龍田を越える道を往復し、まだ残っている、まだ残っていると、かろうじて残る桜のようすを何首も詠みました。しかし、とうとう宇合は、桜の花の時期に戻ってくることはできませんでした。

実際のところ、難波宮の造営が、そう簡単に終わるわけはありません。だとすると、間に合わないとわかったうえで、有名な龍田の桜の花を題材に、時制を巧みに操り、おもしろく表現したとの見方もできそうです。

（本文 万葉文化館　竹本　晃）

龍田古道

今回の歌を詠んだ高橋虫麻呂らが通った龍田古道が残る三室山（三郷町）では、有志の方達が、有名な龍田の桜を復活させようと植樹をすすめています。今では、4000本以上の桜を楽しめるそうなので、桜を楽しみに出かけてみてはいかがでしょうか。

▲龍田古道の桜

クイズ

先月の答え

②大伴旅人でした。

①の大伴家持は大伴坂上郎女の甥になるんだよ。

今月の問題

Q三室山の東に位置する龍田大社に祀られているのは何の神様でしょう？

①水の神
②風の神
③風邪の神

答えは次のページを見てね♪

万葉ちゃん

問 県広報広聴課　☎0742-27-8326　FAX 0742-22-6904